

伏見 勇希 氏（４１歳）

<経歴>

出身が宮城県石巻市でここに来る前は埼玉県に住んでいました。元々システムエンジニアの仕事をしていた、埼玉に住みつつ東京の方に行ったり、千葉県の方で仕事をしたり色々なプロジェクトに参加し仕事をしていました。

２０１６年に移住し、今は梅農家をしています。梅の栽培を２年間ほどしていて、大体１年に１５～２０ｔ位を目処に作っていて、それをやりがてら加工品を作って販売しています。加工品は、主に梅干しと梅のジャム。販売先は、この辺りの道の駅や県外の小売店、県内だと三方五湖道の駅や生協さん、嶺北だとかがみやさんやパーキングエリアで販売しています。最近だと東京にも販売していて、アンテナショップなどで販売しています。

<移住した理由>

梅農家になるために来ました。もともとシステムエンジニアの仕事をしていた、だんだん年齢が上がるごとに人を管理する仕事にシフトしていったので、一生涯ものづくりする仕事はなんだろうなと思ったときに、農業も作る仕事だなと思って、農業をやりたいって思いました。

東京で開催されていた全国的就農相談イベント「新・農業人フェア」に参加し、農業未経験でできる場所はどこか探していたら、若狭町の梅農家の担い手を地域おこし協力隊として募集しているプランがあると聞きました。

元々農業の中でも果樹をやりたいと思っていましたが、果物って植えてすぐ出来ないじゃないですか。若狭町では、担い手の減少から放棄されてる畑があり、その再生が主な役割で、最初からある程度始められることに魅力を感じました。

その年のシルバーウィークに、実際に来てみて、若狭町の梅を食べたら美味しくて。果樹はやりたかったですが、梅は別に好きじゃなかったのも、スーパーでも産地は気にせず中国産を買っていました。中国産の梅干しは、箸で崩すと液状化してしまっているというか皮を食べるという感じになるんですけど、若狭町の紅映は種が小さくて実が大きくてしっかりしているんですね。味も凄くジューシーなことに凄く感動して、これなら自分も作ってみたいと思いました。

梅といったら和歌山ですが、和歌山はその時に募集していなくて。当時比べて若狭町を選んだわけではないですが、自分の場合必ず現地に行ってものは食べていたと思うので食べてもこっちを選んでいたと思いますね。梅の美味しさだったらこっち。数値的にも他の梅に比べて遊離アミノ酸という成分が多い。だから濃い。普通の人には梅干しをしその味をイメージすると思うけど、紅映は梅の味。そこをみんなに知ってもらいたい。

<移住までの流れ>

農家になるにはどうするといいかをネットで調べていたら、新・農業人フェアがちょうど東京で開催されるのをみつけ、実際見てみようかなと思って参加しました。

若狭町が、地域おこし協力隊制度で募集していたのが梅の担い手だったので、協力隊とは言え役場に出勤するのではなく、直接畑に行って地元の梅農家さんの作業と一緒にやって研修したり、自分の研修用の畑の世話をしたり、梅関連のイベントがあったら顔を出してPRしたりするのが主な仕事です。

ちなみに先生は、地元の若い農家さんです。

移住の決め手となったのは、梅を食べて美味しかったのもありますが、景色がすごく良くて実際に住んでみたいと思いました。

＜移住して思うこと＞

若狭町に移住する前は、近所トラブルがあるだろうなという覚悟を持って来たけれど、実際に来てみたらいい人ばかりで。逆に世話してもらって、人に恵まれたなと思ったことが良かったことのひとつ。あとずっとサラリーマンをしていたので、自分で自営業をする自由さですね。自分のペースでできるので働きやすいなと思いました。梅の商品を考えることが楽しい。元々好きなんですね。

＜地域とのつながりについて＞

研修などを通して仲良くなれましたし、移住者同士でも仲良くなったりして人のつながりを感じられた。

＜まちでの暮らしについて＞

梅農家を始めて5年目で家も昨年できて、思い描いていた暮らしができています。今後はもっと梅のPRをしたい！全国で考えると福井で梅を作っているということすら知らない人が多い。このおいしさを伝えたい。

＜移住を検討されている方に一言＞

ぜひ、一度若狭町に来てみてください。来てみて感じることもあるし、観光スポットもたくさんあるし、色々なものがあるので一通りみてもらって好きになってもらいたいです。

2023, 12, 18 第一回インタビュー